

2月2日 主の奉献

マラ 3:1~4 ヘブ 2:14~18 ルカ 2:22~40

1. ルカ

今年は、主の奉献の祝日が主日と重なりました。このような年は比較的珍しいので、私たちは何年かぶりにこの祝日の聖書の朗読配分に耳を傾けます。

v.22 「さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるために、エルサレムに連れて行った。」

幼子イエスは生まれて 40 日目に、律法に定められた通り両親によって主に聖別して献げられました。このとき二羽の鳩が幼子の贖いとして献げられましたが、それが将来の十字架における主御自身の奉献への序曲であったことを覚えて、教会はこの祝日を守ります。

教会はこの幼子の奉献を記念することを通して、万民の救い、異邦人を照らす啓示の光を見るのです。「とうとい秘跡にあずかったわたしたちが主の来臨を待ち望み、永遠のいのちに導かれますように。」(今朝の拝領祈願)

2. ヘブ

実は今朝の福音書の日課は、主日 B 年の聖家族の祝日(主の降誕後の年末の主日)にも用いられるもので、私たちはつい 5 週間前にこれを聞きました。しかし、これに組み合わされている旧約と使徒書の日課が異なっていて、それによって私たちは別の主題へと導かれるのです。

私たち人間の救いのために、御子は受肉して人間と同じ者になられました。人間を生涯とりこにしている死の恐怖から解放し、「死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼす」(v.14) ためでした。

旧約聖書のレビ記に詳細に語られている贖罪日に、アロンとその跡を継ぐ大祭司のために定められた役割(レビ 16 章)に照らして、ここではイエスを「神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司」(v.17) と呼んでいます。レビ記の規定によれば、大祭司は自分のためと民のためにそれぞれの贖罪のいけにえを屠って至聖所に入り、それぞれの贖いの儀式を行いました。毎年、第 7 の月の 10 日が贖罪日と呼ばれて(レビ 16:27)、イスラエルの民のための贖いの儀式が行われる最も厳かな安息日(レビ 16:31)でありました。

主イエス・キリストがすべての民の罪を償うために、憐れみ深い忠実な大祭司となって御自身を十字架のいけにえとして献げられたことを、教会はこの祝日に特別に覚えます。「(キリストは)御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです」(9:12)。ですから旧約時代の「罪を贖うための供えものは、もはや必要ではありません。」(10:18) 「人間にはただ一度死ぬことと、その後に裁きを受けることが定まっているように、キリストも、多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるので

す。」(9:27-28)

以上が、主の奉献の祝日の主題です。

3. マラ

あまりにもよく知られたこのテキストは、その記述の曖昧さの故に多様に解釈されて来ました。マコ 1:2 では洗礼者ヨハネに関する預言として引用され、マタ 11:10 と ルカ 7:27 では主イエス自身によってヨハネにあてはめて語られています。

恐らく主の奉献の祝日の日課では、v.1の「使者」を 2:7 との関連で大祭司キリストを指すものと解釈し、vv.3-4 を「世の罪をあがなう御子の奉献に、わたしたちが一つに結ばれ」(主の洗礼の祝日の奉納祈願) ることと解釈しているように思われます。今朝の集会祈願の「わたしたちも聖霊の光に従い、罪のやみを捨て、みずからをあなたにささげることが出来ますように」は、主の奉献に私たち信者の奉献が一つに結ばれる願いの祈りです。

この私たちの奉献は、神の国の完成の日に至るまで続くべきものであることを、代々の教会は知っていました。かの有名なヘンデルのメサイアの中では、vv.1-2 がキリストの再臨のときの終末の裁きを語る部分で歌われています。私たち会衆の奉献が、キリストの日まで確実に成長して行くことを、今朝主は呼びかけておられます。 アーメン、ハレルヤ。

2月9日 年間第5主日

ヨブ 7:1～7 Iコリ 9:16～23 マコ 1:29～39

1. マコ

vv.38-39 「イエスは言われた。“近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである。” そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。」

福音書が語る神の子イエス・キリストは、ガリラヤから始まってユダヤ全土に宣教し、悪霊を追い出して、人々の罪を赦された救い主です。このイエス・キリストによる救いの福音は、使徒たちに受け継がれて全世界へと宣べ伝えられて行きました。私たちはこの使徒たちの伝えた宣教を通して、神の力である福音(ロマ 1:16)を聞いているのです。

イエスの宣教はガリラヤから始まりましたが、決して一地方や一時代の枠の中の事柄として留まることをせず、「ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす」(ロマ 1:16)福音として、全世界に宣べ伝えられました。ですから私たちは、遠い昔の一地方でのある出来事の夢を見るために、福音書に耳を傾けているではありません。そうではなくて、“現代のキリスト者たちがこれに出会い、これに与かって生きているキリストの福音”の起源に関する使徒たちの証言を聞いているのです。

2. Iコリ

教会が福音の宣教を聞くということは、信者会衆がこのキリストの福音に与かって生きようになるということです。使徒パウロは、この福音を宣べ伝える務めを大切に考え、「福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです」(v.23)としました。

教会はいつの時代にも、新しい(時代の必要が生み出した)福音ではなくて、使徒たちから伝えられたキリストの福音に耳を傾けます。キリスト教会の信仰は、民族や時代によって変化するようなものではありません。

「それは、あなたがたのために天に蓄えられている希望に基づくものであり、あなたがたは既にこの希望を、福音という真理の言葉を通して聞きました。」(コロ 1:5)

「ただ、揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません。」(コロ 1:23)

「福音に共に与かる」とは、このように将来への希望に生きることです。そして「わたしたちは、このような希望によって救われているのです。」(ロマ 8:24)

しかし現代の教会は、本物のキリストの福音を宣べ伝えているでしょうか。現代のキリスト者である私たちは、使徒たちから伝えられた福音を聞いたでしょうか。私たちの教会の中に「神の言葉が働いている」(Iテサ 2:13)という体験を、信者会衆は実感しているでしょうか。

3. ヨブ

v.7 「忘れないでください。わたしの命は風に過ぎないことを。わたしの目は二度と幸いを見ないでしょう。」

このヨブの嘆きの言葉を厭世主義と理解するなら、それは聖書の正しい読み方ではありません。ヨブは絶望と厭世の中で独り言を語ったものではありませんでした。そうではなくて、彼は神に訴えて、神が彼の言い分を否定し、神が自らの答えをもって彼に報いてくださることを期待していました。

ヨブの語る自らの人生は、私たち自身の人生の現実そのままです。もし私たちがキリストの福音を聞かず、福音に与かって生きることをしていなかったら、ヨブの語る絶望と厭世は実に私たち自身のものであったことでしょう。しかし、キリストの福音によって私たちに神の国の希望が約束されたので、私たちはヨブの嘆きの言葉を神への希望の光の中で改めて聞くことが出来るのです。

すべての信者会衆がキリストの福音に与かって生きるために、現代の教会は使徒たちから受け継いだ宣教を継続しなければなりません。それはキリストの福音の宣教ですから、使徒継承に基づく宣教でなければなりません。

同時に信者会衆も、ミサを通して神のことばの食卓の豊かな富を受け取るために、自らの充実した、意識的な、行動的な参加を大切に考える必要があります。

今朝のヨブの嘆きの言葉を通して、神は私たち現代の教会にそのあるべき姿、「あなたがたが最初の日から今日まで、福音にあずかっている」(フィリ1:5) という姿へのひたすらな渴望を、呼び覚まそうとしておられます。 アーメン、 ハレルヤ。

2月16日 年間第6主日

創 3:16～19 Iコリ 10:31～11:1 マコ 1:40～45

1. マコ

v.40 「さて、重い皮膚病を患っている人が、イエスのところに来てひざまずいて願い、“御心ならば、わたしを清くすることがおできになります”と言った。」

御心ならば、すなわち主がそう望まれるなら、罪による悲惨の現実の中から人を助け出すことがお出来るようになる、そのようなイエス・キリストがここに描かれています。

vv.41-42 「イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、“よろしい。清くなれ”と言われると、たちまち重い皮膚病は去り、その人は清くなった。」

このような体験をした人々が、初代教会には存在していました。それは全体から見ればごく少数かもしれないけれども、そのキリスト体験は、福音を信じて救われたすべての信者たちの体験と通じるものであったに違いありません。ですから、一人一人が福音を通してイエス・キリストに出会い、その救いに与かって仲間に加えられて行った初代教会で、このような福音書の中の一人の清められた病人の体験は、信者一同の共有体験のように理解されていたことでしょう。

教会とは、このようなキリスト体験を共有する人々の群れであると言うことが出来ます。神の子イエス・キリストの福音によって、この教会は歴史の中で成長し続けて来ました。信者一人一人の自覚的な信仰と救いの体験が、新約聖書を生み出した原始教会の中でどんなに生き生きとしたものであったかを、私たちは十分に理解することが出来ます。

2. 創

イエス・キリストの救いは、私たちがそこから助け出された罪の世の悲惨の現実を明らかにしました。

キリストの福音を知る前は、私たちは神の前での人間の罪の姿を本当には知りませんでした。しかし私たちが御子イエス・キリストの血によって贖われ、罪を赦されて、神の国の約束に与かる者とされたとき、初めてこの世が神の怒りの対象であったことを知ったのでした(エフェ 2:3)。この世は、人間の(神に対する)罪のために(神から)呪われた世界なのだということを、私たちキリスト者はこの創世記の神話から理解します。

主イエス・キリストの御心は、神の呪いのもとにあるこの世からの罪人たちの救いでありました。ですから初代教会の人々は、来たるべき怒りから私たちを救ってくださるキリストの、終末の再臨を待望する民となったのでした(Iテサ 1:10)。

3.

キリストの福音によって、この世から罪が減少したり、罪の世の悲惨が無くなったりしたのではありませ

ん。主イエスが与えてくださったのは、この世の平和ではありませんでした(ヨハ 14:27)。このことについて、ヘブライ人への手紙は次のように述べています。

「すべてのものを彼に従わせられた」と言われている以上、この方に従わないものは何も残っていないはずですが、わたしたちはいまだに、すべてのものがこの方に従っている様子を見ていません。」(ヘブ 2:8)

聖書が語るキリストの福音は、イエスのいやししの行為による社会の改善ではなくて、罪による悲惨の現実の中からの人々の救いの到来を証言しています。ですから使徒パウロは福音を宣べ伝えて次のように語りました。

「しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。」(フィリ 3:20)

「あなたがたの中で善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださると、わたしは確信しています。」(フィリ 1:6)

4. コリ

このような訳で、私たちキリスト者はこの世に倣うのではなくて、「すべてを神の栄光を現すために」(v.31) すべきです。信者一人一人の自覚的な信仰と、救いの体験が生き生きしていた原始教会と使徒たちの証言に倣うことは、21世紀の教会の目標です。

実に聖書を通して語られる神のことは、「わたしの道の光、わたしの歩みを照らす灯」(詩 119:105) なのです。 アーメン、ハレルヤ。

2月23日 年間第7主日

イザ 43:18～25 IIコリ 1:18～22 マコ 2:1～12

1. IIコリ

教会は、使徒たちが伝えたキリストの福音の宣教によって生まれたものであって、最初の時代から今日に至るまでいつも、この使徒たちの宣教という土台の上に立って来ました。教会は、神の子イエス・キリストの血によって贖われ、罪を赦された人々の群れであって、神の国を受け継ぐ希望を与えられました。

v.20 「神の約束は、ことごとくこの方において“然り”となったからです。それで、わたしたちは神をたてるため、“アーメン”と唱えます。」

今日多くの人々が、キリスト教とはかつてのナザレのイエスの宗教、すなわちイエスが信じ、教え、また実行した宗教であると誤解しています。そしてある人々は、使徒たちの宣教が本来のイエスの宗教を改変し、更に捏造することによって、歴史の教会を生み出したと主張しています。しかしそのような考え方は単なる空想に基づく作り話(仮説)であって、全く事実と反しています。

ですから第二バチカン公会議の公文書の一つである神の啓示に関する教義憲章は、教会に託された啓示の源泉は“使徒たちから伝えられたこと(宣教)”であり、それは聖伝と聖書という形で教会に継承されていると、明確に宣言しています。

2. マコ

この奇跡物語はその場面を、「イエスが御言葉を語っておられると、……」と説明しています。教会の会衆である私たちは、それをキリストの福音に関わる話として聞きます。主イエスは傍らに座っていた律法学者にお尋ねになりました。

v.9 「中風の人に“あなたの罪は赦される”と言うのと、“起きて、床を担いで歩け”と言うのと、どちらが易しいか。」

私たちが知っているキリスト教はどちらかと言うと、人々に“起きて、床を担いで歩け”と告げることをその使命と考えて歩いて来ました。医療や教育から始まって社会福祉や各種救済事業が、教会やキリスト信者たちによって進められて来ました。ただ、かつてはキリスト教の独壇場のように見えたこのような活動を担う主体が、近年は大幅に変化していて、今やキリスト教の役割は相対的に小さなものになってしまっています。

今朝の福音書の日課は、キリストの福音とは何かをもう一度私たちに考え直すことを求めているのです。

“あなたの罪は赦される”と宣言することは、使徒たちが伝えたキリスト教の宣教において、最も核心的なことでありました。使徒ペトロは「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい」(使 2:38)と勧め、使徒パウロは「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです」(ロマ 4:25)と述べています。キリストの福音は

罪の赦しの福音であって、「御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられた」(ヘブ9:12) キリストを宣べ伝えることが使徒たちの宣教でありました。現代のキリスト者である私たちは、今や再び、“あなたの罪は赦される”と宣言するキリストの福音に目を開かなければなりません。

3. イザ

イエス・キリストによる罪の赦しを受けた民である教会は、将来の神の国の相続人であり、再臨のキリストは「その人を終わりの日に復活させる」(ヨハ6:54) のです。この終末の救いに与かる教会への神の愛と熱心が、今朝のイザヤ書のテキストを通して私たちに語りかけています。

v.25 「わたし、このわたしは、わたし自身のために、あなたの背きの罪をぬぐい、あなたの罪を思い出さないことにする。」

イエス・キリストによる罪の赦しの福音こそが、昔も今も神の民である教会を造り上げて行く真の原動力なのです。 アーメン、ハレルヤ。